

## 総評

中津川市新図書館設計者選定委員会は、2回の審査を経て、平成22年9月26日新図書館の設計者及び次点を選定した。第1次審査においては全国より37者という多数より技術提案が提出され、新図書館設計に対する興味関心の高さをあらためて認識させられた。さらに2次審査に向けて、レベルの高い技術提案を適切に評価するための議論を慎重に重ねた。

平成22年7月に新図書館建設市民協議会より提出された提言書には、貸出し型の図書館から滞在型への図書館像への転換が記述されている。中心市街地の賑わいを取り戻すための象徴的な施設として大きな期待が込められたものであった。図書館が中津川の地域的アイデンティティを継承し展開するものであること、さらに市民参加で創り上げていくプロセスが重要であることが明確に示されていた。

5者を対象とした2次審査では、提言書に示された理念である「まちのにぎわい」と「市民参加」をキーワードとする課題を投げかけた。これに対して各者から、精緻な現地分析に基づく新しい図書館の姿が、魅力的な技術提案として示された。審査委員会は、従来の図書館には見られないユニークなアイデアに込められた意図や、想定される運営との関連性を中心に質疑を行なうことで、評価のための貴重な判断材料とした。

提案者によるプレゼンテーションと審査委員との質疑応答の全ては、150名を越える聴衆が見守る中で行なわれ、設計者選定の公開性や公平性を市民に強くアピールすることとなった。5者による技術提案・プレゼンは、いずれ劣らぬ優れた内容を示す相互に拮抗したレベルであり、慎重な判断が求められた。

最終的に優れた設計候補者を選定することができ、具体的な設計体制の準備を整えることのできる段階にたどり着いた。次には完成に向けて市民と設計者の思いを受け止める行政の力量が問われる。技術課題に対し注ぎ込まれたエネルギーは並大抵でないことは容易に想像できる。提案者の皆さんに大いなる敬意を表したい。各者とも、図書館オープン後の関与についてまで言及しており、設計、施工、運営のプロセスを通じて、新しい図書館をきっかけとして中津川が大きく発展することを強く願うものである。

## 個別講評

設計候補者：久米設計

中山道と同一レベルをアクティブな賑わいの空間、上部の2・3階部分の静寂を保つ空間として位置づけ、相互に異なる性格のスペースを断面的に明確に分離した配置が特徴である。中山道に面して配置された「おいでんフォーラム」は街道からわずかに後退しており、その結果生み出された水辺のある余裕スペースと一体となって賑わいの拠点を形成している。この情報発信スペースは図書館部分と明確に区分されており、開館日時の違いを想定した管理区画の考え方などが具体的に示されている点において、複合施設としての運用上の合理性が認められる。まちの賑わいに寄与する独創性と、実現性ある提案が総合的に高

い評価を得たと言える。しかし、市民参加の設計プロセスに関しては標準的な提案にとどまっておき、現実に即した工夫が求められる。

#### 次点：石本建築事務所

中山道側からの敷地断面形状に沿って、5つのフロアーを段々に配置することで、恵那山の風景を館内に取り込んだ案である。各フロアーには、幅広い利用者を想定した上で、中庭を取り巻くように様々なスペースを巧みに配置しており、まちに賑わいを生み出すきっかけとしている。しかし、それが故に多様なサービスを支える職員の配置や動線上の不安が指摘された。また、西側の変形した敷地は、まちと連続する外部空間としており、将来の変化や増築可能性を踏まえた適切な計画となっている。全体として市民協議会の提言をよく理解した案として評価された。市民参加の設計ワークショップの運営については、豊富な経験を踏まえ柔軟な対応が期待できる。

#### 受付番号2

中山道の町並みを専門家の立場からていねいに分析し、建物立面の連続性や歴史的構法の継承性に対する慎重な配慮を示した案である。一般開架部分については平坦なオープンスペースを確保することで、可変性や拡張性をもたせている点が大きな特徴である。吹き抜けを介して恵那山を望むことができる点、駐車場のあり方が中山道の賑わいに関連していることを指摘した点、優先順位によって対応できる計画上の選択肢を示した点など高い評価がなされた。これらの提案性に対して中山道に面して設けられた「みせ空間」については、具体性に欠けている。開館後まで視野に入れた、市民を巻き込んだ検討体制づくりの考え方は好感がもたれた。

#### 受付番号3

図書館がまちの活性化に寄与できる可能性を最大限に示したユニークな案である。特色のある機能を有したスモールスペースを各所に分散させており、来館者を飽きさせることがない。居場所と人とメディアをセットで示した提案書の表現と市民の目線に立ったプレゼンテーションは、提案者が構想する新しい図書館の魅力を十分に伝えるものであった。中山道から引き込まれた「ほん通り」は、まちに新たな回遊性のある拠点の誕生を予感させるものであるが、図書館としての機能運営上の困難が懸念される。また、敷地に余地を残さない配置計画は、将来の機能変化にともなう対応の選択肢を狭めている。

#### 受付番号5

「一方向ラーメン構造」と「燃えしろ被覆」を特徴とする新しい木構造を適用した意欲的な提案である。木構造専門家や地元設計事務所などとチームを構成し、人材育成や地場産業育成をも目指しており、この建設プロジェクト自体をまちづくりの起爆剤と位置づけた。

平面構成は中山道側からフラットな情報ギャラリーゾーン、開架書庫ゾーンを経て、檜の大階段スペースから南のテラスへと連続するわかりやすい構成である。階段スペースは他にない魅力あるユニークな場所を提供している。新工法の木造をこの図書館で採用する必然性が不明である点、歴史的町並みにおける景観上の整合性に欠けている点で十分な評価を得ることができなかった。